

内科医 つれづれ草

高山浩一

⑬

年に1度、西本願寺で京都府立医科大学の追悼法要が執り行われ、私も参加しています。この法要は大学に献体いただいた方々、病理解剖に付された方々への追悼とご遺族への感謝の気持ちを伝える上で、とても大事な儀式です。

年1度の追悼法要

ごあいさつ、医学生代表からの誓いの言葉、最後に西本願寺の僧侶による法話があり、1時間余りで終わります。焼香の間は読経の声、そして香の煙が静かに漂い、阿弥陀堂はとて静かで穏やかな空気に包まれます。このひとときは私に闘病の末に亡くなった患者さんと病理解剖に同意いただいたご遺族を思い出さずにはいません。自分が行ってきた医療を省みる、なくてはならない時間です。

尊い気持ちに感謝

がん患者さんが多く、ホスピスもなかった時代ですから結果的に多くの方が病棟で亡くなられました。

その際には、大学病院で最期



イラスト・山本重也

をみとった医師の義務として病理解剖のお願いをさせていただきました。長い闘病の末に亡くなった場合、進んで解剖してもいいというご遺族はまずおられません。われわれには治療のいかなく患者さんを失ってしまったことに対する無力感とともに、どうして薬が効かなかったのか、医学的な説明がつかない異常の理由は何だったのだろうかなど、多くの医学的疑問が湧き上がります。そして、それは解剖でしか答えを見いだせない疑問でもあります。

くなく、一刻も早く自宅に連れて帰りたいと思つのは当然でしょう。しかし、それでもわれわれはやはり解剖のお願いを申し出ます。ご遺族の中には、恐らくは自らの気持ちを抑え込み、同意していただける方がおられます。本心に頭が下がる瞬間です。尊い解剖の積み重ねが医学の発展に大きく貢献してきたのは、間違いのない事実です。ご遺族から承諾をいただいた時の気持ちは今も忘れることができませんし、決して忘れてはいけなとも思っています。

(京都府立医科大学教授)